HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 平取の文化的景観「風土により形成された」から見る |
| Author(s) | 三木, 昇 |
| Citation | アイヌの伝統を基層にした多文化な景観 : 北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 26-27 |
| Issue Date | 2024-03-29 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/92874 |
| Type | report part |
| File Information | ronshu_biratori (15).pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 平取の文化的景観

## 「風土により形成された」から見る

三木昇
北ノ森自然伝習所 主宰

文化的景観は風土により形成されたものであれば、日本の最北に位置する文化的景観である平取の風土は、気候帯で言えば温帯上部と亜寒帯の下部に位置した中に形作られたと解釈できる。また地質的には上流には古生層、下流には第三紀の地層が分布する中であり、気候的には太平洋側に位置して雪の少ない地域の中にある。

周囲の山々は本州とは異なった景観である。本州であるなら里山の慣れ親しんだ杉や檜の植林地は見当たらず、人々の生活を支えた竹細工の竹林も目にすることはない。
雑木林は本州での馴染みのコナラはあるにしても、ミズナラ、シラカンバ、ホオノキ、イタヤカエデ、ハルニレ、ヤチダモといった様々な落葉広葉樹の雑木林が広がる。シラカンバは本州では高標高に行かないとみられない樹種であり、これが景観の中にあるのはいかにも北国らしいものである。

植林はカラマツも多くあるが、本州では見られないトドマツの木がある。これは信州や東北などの山地上部にあるシラビソやオオシラビソの仲間で、それが里山に植林されている。この事も日本全体からみれば平取の景観を特徴づけるものとなっている。

こうした植生の特性を持つ中で、その景観構成要素のさまざまな樹木を使ってアイヌ民族は道具を作り生活してきた。また、北海道の河原に多いハルニレは火という生活上最も重要なものの火の神様と深い関わりがあるのも、これも北国の文化らしい。シラカンバなど樺類の樹皮を使った容器、灯りの用具、河原で採取できるトドマツの樹脂をためた枝を熾火にするというのも、当地の北国の植生からきたものである。

このような北国の植生の中に、北国の動物たちがくらし、アイヌ伝承を生み出した。神であるヒグマ、食料として重要なエゾシカの生息。これらは北国の山地景観の中に暮らしているもので、景観と結びついた生き物たちである。また、北国の特質の一つとして鷲の存在がある。北海道よりさらに北で繁殖する鷲たちが、冬季に寒さを避けて飛来する。これがヒントになったとおもわれるアイヌの怪鳥伝説がある。羽を広げると 2m を超える大きな鷲が冬季間この地に飛来し、川沿いの大木に止まるというのも北国らしい景観である。

写真１　全体風景
背後は原初的と思われる針広混交林の植生を残し、その中に伝説を生んだ岩壁が配されている。中段の緑は北方樹種のトドマツの植林地であり、周囲は用材や薪炭材として利用されてきた雑木林が見える。また手前のダム湖は現代の景観である。

地質からすると平取の大地は堆積岩を基盤としている。その中でも、アイヌの暮らした地域に分布する礫岩は浸食に強く独特の岩壁、岩峰を作り、幾

写真２　鷲の止まる冬の風景と鷲
冬季には鷲のいる景観が今もある。中央の木は河川改修においてアイヌ文化を尊重する施工により残置された大木である。平取の河川工事は文化を配慮することになっている。　鷲は翼を広げると 2m を超える。

写真３　鮭を採食する鳥
遡上し産卵後の鮭とそれをねらう鳥の姿はアイヌ伝承となっている。

写真４　川州
春の河川敷、川の氾濫によりできた川洲はかつて雑穀畑に利用されることもあった。川洲には柳林が自然にできる。( 中段の緑の部分 )。柳は祈りの道具である幣の作成ために欠く事のできない樹木である。細い物しか利用されることはないので不定期に氾濫する川により常に細く多量の柳があることが、アイヌ文化にとって重要である。

つかは祈りの対象となっている。またその形象が伝説を生んでいるのもこの地の特質である。さらに堆積岩地帯の砂岩や泥岩の風化した土砂は谷間に押し出され、広い河原と段丘を作った。段丘は人々の暮らす集落や畑地となり、広い河原は川洲畑と呼ばれるエジプトの洪水に見られるような、雪解けとともに現れる広大な川洲の適地利用による雑穀畑の文化を作り出した。この川洲は開拓とともに堤防と用水路により水田化、あるいは牧草地化して新たな生業の景観となった。

近代になりアイヌ民族は和人の入植と同化政策という中に翻弄されながら、農業者となり水田や畑の耕作、牧畜という生業を営み今日に至っている。また森林の伐採、植林といった林業にも従事するもの、河原の転石の庭石利用の造園業に従事するものなど近代の生業を営みながら平取の景観を作り上げてきた。これらの景観の中でアイヌ文化を伝承する営みが続けられているのも平取の特質である。

写真５　開拓牧野
牧場の中にある巨木。近代の生業である牧畜の様子。当初は軍馬生産の場であり、今はブランド肉牛の産地である。中央は日陰のための日陰樹と言われる軍馬生産時代からの牧畜技術である。その番人としてアイヌの果たした役割が伝承されている。